

白台祭あれこれ

熊澤 良嗣 調

瀬部の白台祭は陰暦7月10日が慣例であったが、今日では8月16日に行われている。主会場は瀬部八剣社・観音寺の境内である。神社の月次祭が毎月10日実施であるので八剣社の祭りだったかと思われるが、後述の白台由来によれば、観音寺の祭りというのが本来のようである。地元保存会の熱心な継承活動が評価され、平成22年7月21日に一宮市の無形民俗文化財に指定された。

祭りは午前6時に境内で演奏される触れ太鼓「カンカラ」に始まり、終了を告げる午後9時頃の「カンカラ」で終わる。

演奏されるお囃子は 町会(瀬古と呼び5つある)の公民館を出発するときの曲「早道」、神社までの道行きの曲「やなぎはら」・「オヒヤララ」・「歌道」・「新道」、神社へ到着したときの歓びの曲「踊り込み」、神殿に向かって境内を進むときの曲「宮入」、神前で神を崇める曲「神嘗」・「寄せ」、そして山車に移動して演奏する曲「新車」、山車を曳くときの曲「祇園囃子」の 12曲がある。

各曲の演奏時間はそれほど長くはないが、これらを全て覚えるのはなかなか大変であるため、6月から7月の末まで毎日曜夜に瀬部公民館と観音寺で太鼓・笛の練習会が開かれる。更に平成24年11月、お囃子12曲とカンカラ・御巫女太鼓の模範演奏をビデオ収録し、譜面を添えた解説冊子付きDVDとして参加児童や関係者に配布された。

白台祭の由来を探る資料は明治時代の観音寺の火災で失われてしまったらしく、地元には残っていない。ただ、一宮市史西成編には次のような記載がある。

「傳へ曰、聖武天皇の御代、この林叢の西端に大銀杏があって、その梢から光明が輝き其夜里民の夢に『吾は近江国竹生島の觀世音なり、今此土に至って衆生を化縁す』とあったから、暁天に及んで拝すれば樹上に十一面觀世音の仏頭が在したので、驚いて抱き下ろし、伽藍を造営して近江堂となづけた・・・」

「最初仏頭を抱き下ろした際、直ちに最も清浄な^{ひきうす}礎臼の上に安置した由来により、今尚毎年陰曆7月10日、^{うすだい}礎臺祭（臼台祭）と称して、山車の上に礎の形を据え、月の数・日の数提灯を点じて、笛太鼓の囃子面白く礎臺を廻しながら詣でる奇祭を執行する。」

つまり滋賀県（近江）の^{ちくぶしま}竹生島から觀音様の首が飛んできて、瀬部村の鎮守の森にあった大銀杏の木に掛かったのが、觀音堂（近江堂）を建てて祀った。また最初しばらくの間觀音様の首を清浄な臼の上に安置していたことから臼台祭が始まったという。なぜ竹生島なのだろうか。そこは不明だが、竹生島は古くから信仰の島であって神社や国宝の「宝巖寺」があり觀音堂も存在している。

以上から臼台祭は觀音寺の祭りであったことは明らかである。ところが明治政府の神仏分離令、祭政一致の考えによって寺院が主催する祭りは禁止されてしまった。それに対するささやかな抵抗の証しが、山車の正面と背面の行灯に見られる「八劔社」・「觀音寺」の文字である。

臼台祭の由縁は上述の臼台（挽き臼）を山車の上に据え付け、臼の穴に竹を通して先端から下へと1年の月数を表す提灯を下げ、臼の上に巻わらを固定して1年の日数分の提灯を竹竿に結んで突き立てるからである。

現状では臼と巻わらは「蜂の巣」と呼ばれる金属製の太い筒に変わり、山車の2階部分

に固定されている。中心を貫く竹も金属製のパイプになり、蜂の巣だけが臼のように回転する仕掛けになっている。これが臼台祭のユニークな点である。

月提灯の数は通例は12であるが、閏月がある年——旧暦の太陽太陰暦で月を追加する年——には13の提灯を取り付ける。蜂の巣には1年の日数分の提灯を取り付ける決まりだが、ローソクが途中で消えることや時間の制約もあって、すべてを完全に取り付けることは至難の業であるという。

最後に「カンカラ」について私見を含めて少し述べることにする。カンカラは甲高い音がする細い胴の太鼓で、これを叩くには細いバチ（桴・枹）が必要である。

昭和41年10月7日に一宮市文化財永久保存用として、観音寺において臼台祭のお囃子が録音された。収録に当たったのは一宮市博物館、演奏したのは当時の笛・太鼓の名人とされた瀬部の古老たちであった。

録音の中に「昔木曾川の洪水で堤防危険の際に打ったと伝えられるイッポンバエのカンカラで、臼台祭の始まりと終わりを町中に伝えるもの」というナレーションがある。「イッポンバエ」とは、寄せ木でなく一本の木をくりぬいて作った胴の意味ではないかと思われる。カンカラは2本の枹で叩くので「イッポンバチ」の言い間違いではない。

また「木曾川の洪水で堤防危険の際・・・」であるが、瀬部は木曾川から大分離れているので、何となく現実感に乏しく違和感がある。しかし、ぐるりんマップ追加情報15の「日光川とは」で述べた、瀬部の北を流れていた古川（昔の木曾川）に言及していると考えれば極めて現実味を帯びてくる。